

「国語教育実践——短歌とミュージアムを結ぶ——」  
Teaching Practice Report: Connecting Tanka and Museums

大 國 眞 希

福岡女学院大学 教職支援センター  
教育実践研究 第8号 抜刷

(2024年3月)

# 「国語教育実践——短歌とミュージアムを結ぶ——」 Teaching Practice Report: Connecting Tanka and Museums

大 國 眞 希

平成30年に告示された「高等学校学習指導要領（国語編）」には、「文学国語」の目標として、「深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができる」資質・能力の育成を掲げている。そして、それらの育成のために「自由に発想したり、評論を参考にしたりして、小説や詩歌などを創作し、批評し合う活動」や「グループで同じ題材を書き継いで一つの作品をつくることなど、共同で作品制作に取り組む活動」「設定した題材に関連する複数の作品などを基に自分のものの見方、感じ方、考え方を深めること」「テーマを立てて詩文を集め、アンソロジーを作成して発表し合い、互いに短い論文などにまとめたりする活動」を通じて指導するものとするとして示されている。これらのことを踏まえながら、本稿では、短歌を創作する活動の方法と可能性について考えてみたい。短歌と言えば、2021年に短歌をテーマに日本国語教育学会が開催されたことも記憶に新しい<sup>(1)</sup>。その際、山元隆春は「発見の契機としての詩歌学習」と題した講演をおこなった。そのなかで、自分自身の著作を何年か振りに読み返してみたら「書いた当時は気づいていなかったことがわかってきた」が、「にもかかわらず、作品は、確実にそこにある。これはどういうことか、ずっと考え続けています。あとから考えて、わかるか、わからないか。それは、振り返って新しい疑問をどう自分にぶつけ、積み重ねていくか、模索の繰り返しです」と作家でありフランス文学者でもある堀江敏幸が書いている部分<sup>(2)</sup>を紹介しながら、山元隆春は「わかる」にある2つの側面を指摘する<sup>(3)</sup>。

一つは「あのときにこういう書き方をしたのは、こんな経緯で、こういうふうに感じていたからだろう」と「問い直したくなること」です。堀江さんのこの文章自体がその「問い直し」の実践です。

もう一つは「どのようにして作品ができあがったのか、自分でもわからないという事実を確認できること」です。(35p)

そして、更に以下のように続ける。

ここで行われているのは自作についての「読み」や「解釈」です。本や文章を「わかる」「わからない」ということも、基本は同じです。堀江さんが言うように「終わりがない」ところも、創作と同じ。「読み」や「解釈」にも終わりはありません。(36p)

つまり、山元隆春によれば、「読み書きすることは、個人の行為にとどまらない、もっと大きな読み書きの共同体に属すること」を意味し、「「わかる」こともまた「ノイズ」を聴き取りながら「待つ」こと」であり、「短歌をつくって推敲するプロセスで、他の人の言葉に触れることで、こういう「わかる」が起こっていく」のだ。

無論、短歌を言語活動に取り入れたからと言って、すぐに理解と発見がもたらされ、学習者の考えが深化したり、新しく変わっていったりするわけではなく、何らかの仕掛けが必要となるだろう<sup>(4)</sup>。言語活動を通しての理解と発見の難しさは、ひとつにスティーヴン・ハルナッドのいう「記号から記号への漂流」を手掛かりとして考えることもできるのではないだろうか<sup>(5)</sup>。

このことを考慮にいらて、本稿では短歌とともに、時間が経っても変わらずに存在する「も



写真 1

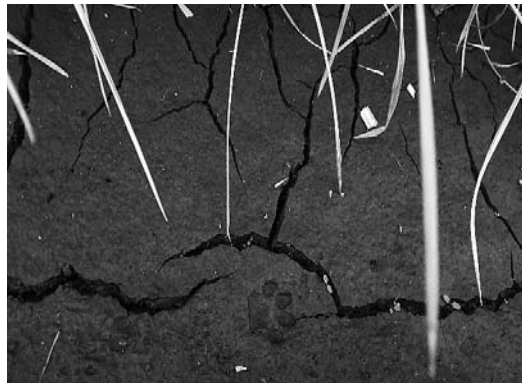


写真 2

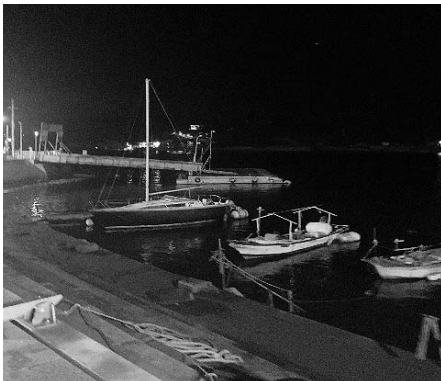


写真 3



写真 4



写真5



写真6

の」<sup>⑥</sup>として写真を活用し、更にミュージアムを擬したコミュニケーションにおける「陶冶 (Bildung)」<sup>⑦</sup>を取り入れたい。具体的には短歌を詠む前に、第一の活動として、学習者たちに「存在を感じる」写真を撮影する活動を行う。「存在を感じる」という縛りによって撮影者の主観、ことに身体的な感覚が反映されることが期待される。以下に、大学生を学習者におこなった授業で提示された写真を説明の補助のために紹介する。この実践では Google クラスルームを活用し、課題として提出した。

次に4人のグループで、提出された写真の撮影者を明かすことなく、撮影者さえ気づいていないかも知れないことも含めて、その写真で気づいたことを指摘しあう。写真5や6に示したように、教室の壁の落書きや椅子に貼られているシールから、場所を特定したり、シールを剥がそうとしている来歴などを考える姿や、写真2に見られるように、動物の足跡を発見し、なぜ2つもしくは4つではなく、ひとつしか足跡が残っていないのかを推測する姿や、写真4に見られるように蓋に載る小さなテントウムシに言及する姿、そのほか、これは妄想かも知れないけれど言いながら、見えて来る景色や物語などについて話しあう姿が見られた。

第三の活動として、他のひとが撮影した「存在を感じる」写真を用いて展覧会ををするとしたらどのような部屋にわけるか、どのようなキャプションをつけるかを写真について、話しあった第二の活動をしたグループで話し合う。話し合いの後、各グループがどのように分類したか、分類に従うとどの写真がそれぞれの分類に入れられるかを発表する。このような活動して、撮影者も写真を観察した者も自分たちが見ていた物語とは別の文脈を体感することが可能となる<sup>⑧</sup>。

第四の活動として、自分が撮影した写真ではない写真を選んで、短歌を詠み、歌会を開く。大学生を学習者として実践した際には、「こっそりと抜き足差し足忍び足でも残ってる小さな足跡」「ひとりきりくつろぐ海辺よくみたらかわいのお客も来たみたいだね」「雨上がりヒビが入った地面には可愛い足跡残したままで」「公園でひとり寂しく見えるけど回りは人で溢れているよ」

「人気無い港に佇む船達は今や今かと朝を待つのみ」などの歌が詠まれた。作歌の際には他の学習者の発言や議論の内容を取り込みながら、今一度自分を通して「写真」を詠む姿が見られた。歌会では、どの写真を対象にした歌か、誰が詠んだ歌か公表されていない状態で、自分が特に惹かれた歌を選び、どのような状況が詠まれていると考えたか、どのような点が工夫されていると考えたか、どのような点に惹かれたか、どの写真を選んで詠んだと考えたかを発表していく。三日月が移り込んでいる写真が複数あった場合、月が詠まれた歌は複数あるうちのどの写真をえらんでいるのかを考えなくてはならない場面があったり、同じ写真から詠まれた短歌を比較する場面があったりと、更に写真という「もの」を通じて、それぞれのもつ世界についての分析や考察を深める時間をもつことが可能となる。

そして、歌会の最後には、詠んだ歌の作者、写真の撮影者を明かし、それぞれの考えを聞く時間を持ち、最後に学習者ひとりひとりが全体の活動を通じて、考えたこと感じたことを発表する。具体的な場面では、写真3の撮影者が、「朝を待つのみ」という短歌を詠まれたことに対して、夜明けに撮影したものであり、船に存在を感じたことが伝わったと話す姿が見られた。自分が他者である相手の書いたものをどのように考えるのかを客観的な文章で伝えるのを受けとめるのではなく、他者が自分の視点に立ちながら主観的に詠んだ短歌を聞くという方法によって、自分と同じように感じてくれた、自分の考えていることが伝わったと能動的に受け止める様子が見られた。このような主観のありかたもまた文学の教育的な意義と言えるのではないだろうか。自分も含めて、理解することは発見することであり、待ち続けること、考えつづけることである。

#### 【註】

- (1) 日本国語教育学会西日本集会宮崎大会は「短歌県で知られる宮崎の実践報告」というテーマのもと2021年6月19日に開催された。その様子は『国語教育研究』507号に報告されている。
- (2) 堀江敏幸「あとからわかること」(桐光学園・ちくまプリマー新書編集部編『続・中学生からの大学講義3 想像するということ』(筑摩書房、2018) 114p
- (3) 山元隆春「発見の契機としての詩歌学習」(『月刊国語教育研究』597号)
- (4) 短歌を活かした教材化・実践などについては数多く優れたご論考がある。藤寄啓子「豊かな学びが、広がり深まる読書活動——「短歌変身集」「短歌祭り」の表現活動を通して——」(『月刊国語研究』617号) など。
- (5) Harnad, S (1990). The symbol grounding problem. *Physica D: Nonlinear Phenomena*, 42. 今井むつみ・秋田喜美『言語の本質——ことばはどう生まれ、進化したか』(中公新書、2023) では、ハルナッド「記号接地問題」の「記号から記号へのメリーゴーランド」がわかりや



すく解説している。それによると、「認知科学者のスティーブン・ハルナッドは、人間が機械に記号を与えて問題解決をさせようとしたAIの記号アプローチを批判し、記号の意味を記号のみによって記述しつくすことは不可能であると指摘した。言語という記号体系が意味を持つためには、基本的な一群のことばの意味はどこかで感覚と接地（ground）していなければならない、というのが彼の論点である」（124p）。本稿の「記号から記号へのメリーゴーランド」という語も同書から引用している。また、今井康雄は東京都現代美術館での鑑賞授業の後に生徒たちが書いた感想文を通覧し、「言語表現」を重視するならば「感覚的な一語文で尽きている感想」を書いた学習者よりも「自分なりに考察したかなり長文の感想」を書いた学習者のほうが深い経験をしたとは言い切れないのではないかと指摘する。「意味づけへの努力は、かえって作品から受けた衝撃を切り詰めてしまうような働きをもつ可能性もある」（今井康雄「モノの露呈と制作過程におけるその経験」今井康雄編『モノの経験の教育学』東京大学出版、2021 62p）からだ。

- (6) 堀江敏幸が「にもかかわらず、作品は、確実にそこにある。これはどういうことか、ずっと考え続けています。」と書いたことを受けて、山元隆春が理解と発見について述べたことは先に紹介したとおりだが、「モノ」を重視する論考としては今井康雄「《いつもとちがう風景》をめぐる考察」（今井康雄編『モノの経験の教育学』（前掲）がある。同書において、今井康雄は「いつもとちがう」自己を見出す契機として、「意図以前に、あるいは意図をカッコに入れたなかで、出会ってしまう対象を、「モノ」と呼びたい」として、「モノのレベルにおいて意図の転轍ないし横滑りが生じ、そのダイナミズムを基盤として新たな「世界」が目の前に現れる。モノとはこのような転轍ないし横滑りは生じる場だと見ることもできるだろう」（100p）とする。
- (7) ミヒヤエル・パーモンティエは、ミュージアムを「自己形成の場」「開かれた陶冶の場」と呼ぶ（『ミュージアム・エデュケーション——感性と知性を拓く想起空間——』（眞壁宏幹訳 慶応義塾大学出版会、2012）。
- (8) ミヒヤエル・パーモンティエは、ミュージアムミュージアムの展示について、「展覧会企画者は結局のところ自分自身しか、すなわち自分の経験や勘しか頼ることができません。せいぜい、自分自身の偏愛、すなわち非合理的な基準に従うだけです。はじまりは徹頭徹尾、感情規定的なのです。しかし、少なくとも最初の有効打がモノの間の安定した結合形態をとることに成功した場合には、心情諸力とならんで悟性諸力も運動を始め、結合の技が止むことはなくなります。そのとき展覧会の展開のなかでも熱いあの局面が始まります。すなわち、キュレーター、展覧会企画者、担当チームは、コレクションの物品を互に関係づける統制され慎重なやり方で、新しい意味と見方を創りだすのです」（144p）と指摘し

ている（『ミュージアム・エデュケーション——感性と知性を拓く想起空間——』前掲）。